

の中根先生、中根文字、先生のご健康を祈ります！」と書いてあったのです。私はあまりのことに思わず感涙に打たれ、暫くはものも言えなかつたのです。

京都に帰ってから医者に通つたのですが、どうもはかばかしくよくなりないので、もう一度白浜に行つたのです。今度は研究でなく養生に行つたのです。実さんのすぐ上の兄さんの武夫さんは、薬学専門学校を出て薬局の経営をしていたので、ご両親や長男の英生さん、武夫さんたちがみな心配されて、あれこれといろいろ薬を飲ませていただいたのですが、どうも良くならないのです。一週間か十日くらいしてからとにかく京都に帰ることになったのです。しかし身体が弱つているので、一人で京都まで直行して帰れそうにないのです。そのころ白浜から京都まで帰るのには七、八時間ぐらいかかるのでした。そのため皆さんがご心配になり、大阪まで実さんを付けてやり、大阪で一泊してから帰るようにといいことにしていただいたのです。大阪で実さんといっしょに一泊した翌朝です。私は実さんを中根式速記協会の大阪支部長山口隆康さんに紹介しようと思ひ、紹介状を実さんに渡し、こんどは一人でやつと京都に帰つたのです。そのころ私は兄の家にはいたのですが、午後になつてから山口支部長さんが私の病気を聞いて心配され、実さんといっしょに見舞いに來られたのでした。二、三時間も話をしたかと思うのですが、二人が帰られてから三十分もしたかと思うとき、私あて一通の電報が届いたので。誰から何の用事かと思つて見たら